



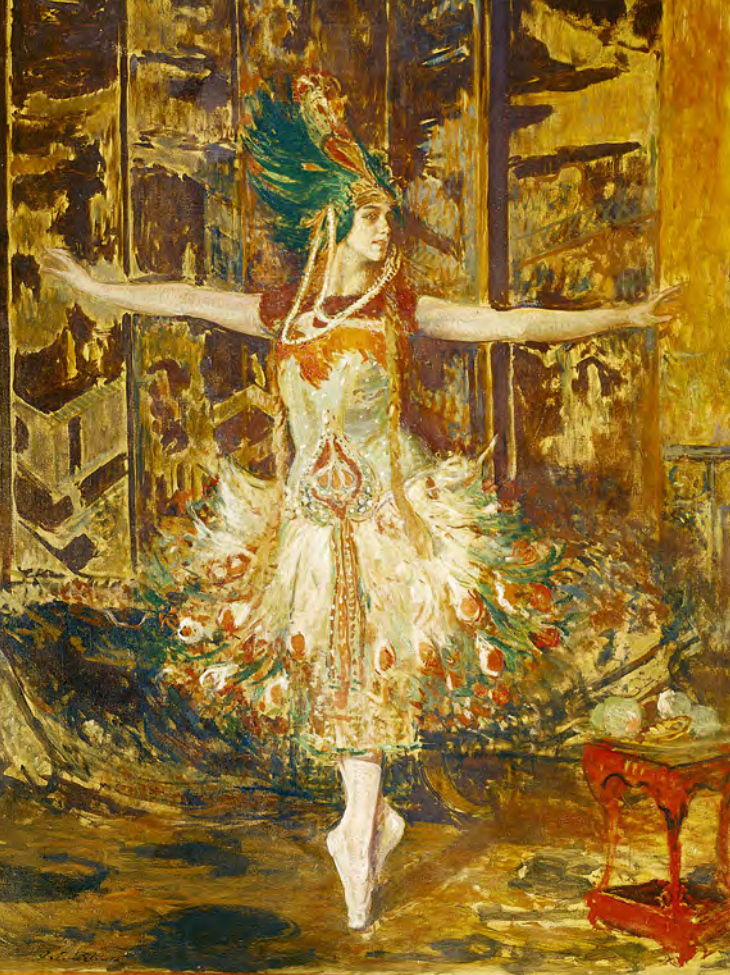
FEATHERS AND FLAMES

火の鳥、100年の系譜

原典版で火の鳥を演じる
タマラ・カルサーヴィナ
(上および左)。
振り付けを担当したミハイル・
フォーキンが1910年の
初演でイワン王子役を
演じている(左)。

ストラヴィンスキーの「火の鳥」は、長い年月の間に多様な編曲がなされ、繰り返し上演されてきたが、原典版に忠実な振り付けが今日まで伝わっている。その華麗なる歴史をたどる。

文 クレア・ラサール



バレエはファッションと同様、身体で表現される芸術である。したがって、スタジオでダンサーに稽古を付ける振付家は、単にステップやポーズ、頭のなかにある構想を言葉で説明するだけでなく、必要とあらば手とり足とり実地で教えるなければならない。それはまさにダンスを次の世代に伝える作業である。口から発する言葉によって、また身振りを真似ることによって、先輩から後輩へ、師から弟子へ、ダンスはその原典とつながりを保ちながら受け継がれていく。しかし、ここで再び洋服の仕立てを例にとるなら、無数のダンサーたちによって、長年試着されるうちに形も変わり、縫製に使われた糸はほつれ、やがてぶつりと切れてしまうこともあるかもしれない。

英国ロイヤル・バレエ団によるストラヴィンスキーの「火の鳥」の復刻上演は、ほかのカンパニーのレパートリーとは一線を画している。発表から100年以上の歳月を経ているにもかかわらず、原典版の台本を書いたロシアのバレエダンサーで振付家のミハイル・フォーキンと固い絆で結ばれているのだ。

「火の鳥」はバレエ・リュス（ロシア・バレエ団）のために書かれた作品で、1910年にパリで初演され

ている。題名にもなっている火の鳥の役は、振付家のフォーキンのロシアの伝説的バレリーナであるタマラ・カルサーヴィナのために練りあげたものである。1954年に英国で復刻上演された際には、主役を務める英国のスター、マーゴット・フォンテインに、カルサーヴィナが直々に稽古を付けている。その20年後、今度はフォンテインが、初めてこの役に挑むモニカ・メイソンを指導している。そして、そのメイソンが今まさにロイヤル・バレエ団のダンサーたちに、作品に込められたフォーキンの意図を直伝しているのだ。かくしてこのバレエ作品は、同時代の作品には珍しく、今日まで純粹な系統を保っているのである。

そのおかげで、鳥の姿に変えられてしまった主役の女王は、決して従順なプリンセスではない、ということが広く知られている。彼女は美しくも魅惑的な猛禽、恐ろしい存在なのである。初演前のリハーサルで、フォーキンは小柄なカルサーヴィナに「神のごとく、強大なる力を持って、羽ばたいて！」と指導し、そのカルサーヴィナは後にフォンテインに対して、火の鳥の激しさを表現するために歯を剥きだすよう助言している。その力強い火の鳥がある日、通りかかったイワン王子に捕らわれてしまう。再び自由の身となるために戦う彼女だったが、やがて懇願し、果ては自由と引き換えに魔法の尾羽を差し出すことになる。

しかし後に彼女は敵対者から救い主へと変容する。王子は魅惑の園に迷い込み、そこで黄金の林檎を採る遊びに興じる12人の娘たちに出会う。このあたりは、まさに独創的で意味深な振り付けがなされている。王子はその娘たちのひとり、美しいツァレーヴナと恋に落ちる。ところが、娘たちの前に突然、魔王

カスチエイが現れる。カスチエイはロシアの民話に登場する不死身の悪魔で、醜悪な臣下たちを引き連れている。次の場面では一転して大勢のダンサーが登場し、快活で脈動的な「地獄の踊り」を舞う。イワン王子は命の危険を察知して火の鳥を呼び出し、その助けを借りてカスチエイを倒す。ツァレーヴナは嗜れて悪魔の手から逃れ、イワンと結婚するのである。カスチエイの宮殿が消滅し、捕われていた人々が生き返り、台本でいう「大団円」のうちに作品は終幕を迎える。

火の鳥が魅力的な役柄であることは疑うべくもない。今日を代表する踊り手であるイタリア生まれのバレリーナ、マール・ガラツィイは火の鳥について、「技術的にきわめて難しく、とにかく消耗する役。ジャンプが多く、それに腕の動きを合わせなければならぬので、背中が痛みに悩まされる」と告白している。

踊りこなすのが困難な役であることは想像に難くない。まずステップからして複雑だ。バレエのポーズや

カスチエイが現れる。カスチエイはロシアの民話に登場する不死身の悪魔で、醜悪な臣下たちを引き連れている。次の場面では一転して大勢のダンサーが登場し、快活で脈動的な「地獄の踊り」を舞う。イワン王子は命の危険を察知して火の鳥を呼び出し、その助けを借りてカスチエイを倒す。ツァレーヴナは嗜れて悪魔の手から逃れ、イワンと結婚するのである。カスチエイの宮殿が消滅し、捕われていた人々が生き返り、台本でいう「大団円」のうちに作品は終幕を迎える。

火の鳥が魅力的な役柄であることは疑うべくもない。今日を代表する踊り手であるイタリア生まれのバレリーナ、マール・ガラツィイは火の鳥について、「技術的にきわめて難しく、とにかく消耗する役。ジャンプが多く、それに腕の動きを合わせなければならぬので、背中が痛みに悩まされる」と告白している。

(左) 1956年の「火の鳥」で踊るマーゴット・フォンテイン。
(右) 1954年の公演時、フォンテインに演技指導したタマラ・カルサーヴィナは、当時69歳だった。
(上) フランスの画家ジャック＝エミール・ブランシュが1909年に描いた、火の鳥を演じるカルサーヴィナの肖像画。衣装デザインはロシアの美術家レオン・バウストが担当している。

